言語文化学科

ドイツ語フランス語圏言語文化コース
フランス語圏言語文化領域

Francophone Language and Culture

フランス語圏言語文化領域について

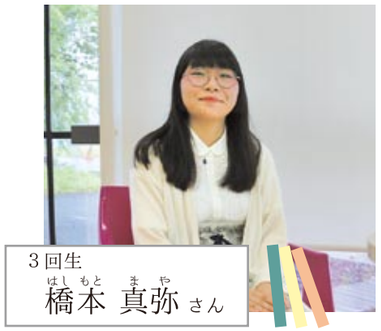
本領域ではフランスだけでなく、ベルギーやスイス、カナダ、アフリカやオセアニアの国々など、世界にひろがるフランス語圏世界を範囲に含めつつ、言語学・文学・文化学という3つの柱から教育・研究を行なっています。基本となるのはもちろんフランス語の習得ですが、その言葉から織りなされる文学、背景となる文化についても知識を得ながら、自分が関心を持つ事象を深く掘り下げる調査スキルや分析力、自分の考えを的確に表現する力を培い、卒業論文がその集大成となります。過去の卒論テーマを見るとわかるように、うちの特色は「自由」です。それは単なる「勝手気ままま」ではなく、様々な経緯からつくられてきた常識の枠を疑い、揺るがす姿勢のことです。そうした自由さを求める人にお勧めです。

先生の研究

19世紀末から20世紀に活躍したサラ・ベルナールという女優に着目し、女性への抑圧や蔑視が強かったこの時代のフランスで大きな影響力を持つアーティストとなった彼女の戦略を、当時の社会背景や、作家、報道、メディアとの関係から研究しています。当時のフランス社会は俳優への偏見も強く、またユダヤ系であったサラへの風当たりは特にドレフュス事件の頃に激しくなりますが、それを乗り越えて世論を味方につけた彼女の舞台や行動の軌跡は、ただ美しいとか演技が上手いだけではない、並外れた強さを示しています。この研究を通じて蓄積してきた背景知識は、近年、共同研究として取り組んでいるアール・ヌーヴォー運動の再考察にも活かされています。

准教授 白田 由樹（しらた ゆき）先生

橋本さんへのインタビュー



3回生 橋本 真弥（はしもと まや）さん

○コースを選んだきっかけ

幼少期から『ベルサイユのばら』のような華やかなフランスの世界に憧れがありました。また、高校時代にロワール川の古城群写真をみて感銘を受けたことや、大学の新修外国語の授業での文化紹介でフランスへの憧れがより強くなったこともあり、迷いなくこのコースを選びました。

○コースでの学び

フランスにかかわることなら何でも学ぶことができますが、特に文学作品の読解が楽しいです。当時の生きたフランス語に触れ、日本語との言葉の感覚の違いも実感することができました。

○コースの雰囲気・PR

先生方との距離が近く、わからないことがあればいつでも質問することができます。研究対象に対する愛と情熱があれば、自分のペースでフランス語圏に関してより深く理解することができます。

卒論タイトル例

◆ゴーギャン作品における犬モチーフは、彼自身の姿を表しているか

◆フランス語の不定冠詞 des を巡って―形容詞・人称・時制が与える規範意識への影響―

◆1995年ケベック独立投票における独立への意識と言語知識の関連性

教員紹介 ※2019年度時点

福島 祥行 教授 Yoshiyuki Fukushima
相互行為論、会話・行動分析、コミュニケーション研究、〈弱いロボット〉の思想、言語教育＆学習（グループワーク、ポートフォリオ）、複言語・複文化主義、言語学、防災と演劇、境界論、仏語圏学
『キクタン フランス語会話【入門編】』（アルク、2016）

白田 由樹 准教授 Yuki Shirata
19世紀末フランス・ベルギーの文化、ジェンダー表象の研究。
『サラ・ベルナール―メディアと虚構のミューズ―』（大阪公立大学共同出版会、2009）

原野 葉子 准教授 Yoko Harano
20世紀フランス文学・文化。戦争、実験文学、空想科学。
編訳 ボリス・ヴィアン著『夢かもしれない娯楽の技術』（水声社、2014）

フランス語圏言語文化領域にとって「物語」とは？

「ガリア人」を知っていますか？カエサルの『ガリア戦記』に記録されている、ローマに制圧された民族のことで、フランス人の祖先とされる人々です。この書に登場するガリアの英雄ウェルキンゲトリクスをモデルにした物語が、フランスの人気漫画（アニメや実写映画にもなっている）『アステリックス』です。小柄だけど知恵者で勇敢な主人公アステリックスは、人のいい力持ちの盟友オベリックスたちと一緒に、ローマ軍の侵略や陰謀を次々と打ち破って活躍します。史実上のウェルキンゲトリクスは最後にはカエサル率いるローマ軍の前に降伏しますが、『アステリックス』シリーズでは、今でも主人公が仲間たちと敵を小気味よく撃退しています。抑圧や不公平に抵抗して戦うヒーローやヒロインは、フランスで支持される人物像のひとつの典型で、実在の人物でもド・ゴール将軍やピエール神父（気になる人はネットで検索！）が「偉大な人物」とみなされています。
（文・白田先生）

「1953年」1949年に文学部の前身である法文学部文学科が創設され、その後文学部として独立しました。

文化構想学科

表現文化コース

Culture and Representation

表現文化コースについて

表現文化コースは、現代社会の文化現象を「表現」という切り口から考察・研究するコースです。表現文化コースが提供するプログラムの特色は、現代社会の多様な文化現象における「表現」あるいは「表現する行為」に注目し、それを「表現の歴史」、「表現が生み出される場としての社会」、そして「表現に形を与えるメディア」の3つの観点から多面的に考察する点にあります。この複眼的なアプローチが表現文化の特徴であり、あつかう対象は特定の表現ジャンルや時代に限定されません。したがって、表現文化コースに向いているのは、第一に、好奇心旺盛な人、第二に、理論的思考に関心のある人、そして第三に、自分が深く考察したいと欲する対象をみずから見つけていくことのできる主体性のある人です。詳しくはコースのHPをご覧ください。

先生の研究

現在の研究は、大きく2つに分けられます。ひとつは20世紀前半のドイツ文化の歴史的研究であり、特に群集という存在を主題にした思想や文学の展開をあつかっています。群集という主題は、今日再びアクチュアルになっています。デモや集会のような集団的な政治行動が世界中の都市で活発化していますし、ビッグデータのテクノロジーは、私たちを個人としてではなく統計的に把握される「群れ」として解析しています。

もうひとつの主題は、映画研究の知見を応用することで、人形浄瑠璃の近代化の歴史を観客の体験の観点から再構成することです。映画に代表される近代的な視聴覚メディアの体験に慣れ親しんだ観客と人形浄瑠璃という伝統芸術との出会いを多面的に考察しています。加えて、国内外の新作映画について、定期的に批評を各種媒体に執筆しています。

准教授 海老根 剛（えびね たけし）先生

授業紹介

来年度から開講される表現文化コースの授業についてひと足先に聞いちゃいました！

高島先生に聞いた

比較表現論

複数文化圏の説話（昔話、伝説）を題材とし、ディスカッションや発表も取り入れ、話型やモチーフなどの比較説話研究の基本事項および方法論、さらに説話の国際性、地域性を学びます。様々な民族の説話に触れ、思考することを通して、自国文化を相対化する視点を養い、文化的多様性を尊重する社会の実現のために説話の果たす可能性を考えます。

海老根先生に聞いた

表現文化論基礎演習

表現文化コースに進学した2回生全員が最初に受講する少人数の演習授業です。受講生はまず映画、マンガ、写真、演劇といった様々なジャンルの作品について、みずからの考察を文章にまとめます。そして授業では、分析に不可欠な視点や基礎概念を導入しつつ、共同で作品を分析します。考察と議論を通して、多様な表現を柔軟に考察する力を養います。

研究テーマ例

◆宝塚歌劇団が発信する物語―『グランドホテル』を中心に見る「伝統と継承」の物語受容―

◆戦争画がもたらした現代への影響

◆少女マンガ『カードキャプターさくら』にみる「魔力」表象とジェンダー観

教員紹介 ※2019年度時点

野末 紀之 教授 Noriyuki Nozue
19世紀末イギリスの文学および文化思想。
『文体のポリティクス―ウォルター・ペイターの闘争とその戦略』（論創社、2018）

高島 葉子 教授 Yoko Takashima
民間説話・民間伝承の比較文化的研究。
"Successful Marriages between Kamuy and Humans in Ainu Folktales: A Comparison with Animal-Human Marriages in Northern Peoples' Tales", Comparative Culture, No.124, (2016)

増田 聡 教授 Satoshi Masuda
ポピュラー音楽研究、都市大衆文化研究、文化所有論（著作権、作者論など）
『聴衆をつくる―音楽批評の解体文法』（青土社、2006）

海老根 剛 准教授 Takeshi Ebine
表象文化論
「〈大衆をほぐす〉―シアトロクラシーと映画（館）」（『a+a 美学研究』第12号所収、大阪大学美学研究室、2018）

表現文化コースにとって「物語」とは？

物語を文化現象として考察する場合には、大まかに言って、2つのアプローチが可能です。第一のアプローチは、物語を言語的なモデルにしたがって考察することです。つまり、物語をある特殊なタイプの記号の秩序として考察するのです。このアプローチでは、物語を言語的な構築物（簡単に言えば文の連なり）との類比において理解しようとします。こうした研究は、ナラトロジー（物語分析）と呼ばれています。第二のアプローチは、物語を人類学的な事実として考察します。つまり、人間を特徴づける文化的実践として物語を考えるわけです。こうした観点から考察するとき、物語、あるいは物語るという営みは、人間がみずからの周囲の世界や自己の経験を理解し、それを他人に伝達する活動だということになります。この後者の観点から物語を考察したユニークな試みとして、ドイツの批評家・思想家ヴァルター・ベンヤミンの「物語作者」というエッセイがあります。興味のある人は、チャレンジしてみることをお勧めします。
（文・海老根先生）

大阪市立大学法文学部出身の芥川賞受賞作家の名前は？